



——この一瞬に全てがある。七面山ご来光——

△卷頭の言葉△

驚峰会本部というより、「驚峰」発行事務所を本妙庵において四年目になります。常に仏教者の理想的行動を望んで驚峰会活動の中心となつて努力されている日高上人も近年多忙を極め、学生諸君との共同研修もなかなか思うにまかせませんでした。今年よりは何事も地に足をしつかり踏まえて進むことに主力を注ぎ度いと思うところですが、それにはまず何としても学生諸君引いては求道志願諸賢の信心より起る行学二道研鑽への不斷の熱愛を待たねばなりません。「本年こそは」お互いに頑張りましょう。「本年こそは」「きようこそは」そして「今一時こそは」で生涯を終えたとしても、それは無常転変の世に生きる最良策だと思うのです。いつも「今」という「はじめ」に立ち、このところで「人・時・処」を最高に命がけで生きることこそ万事成就の秘訣であるし、結局それしか生きる方法は無いのです。「今に立つ」というところに驚峰会の生き方を見、本妙庵の明け暮れを見い出すのです。

目 次

卷頭の言葉

釈尊と法華經との体用関係

真理はあたたかい

日高白象

新春座談

諸君！鷲峰会をどう考る

編集部

鷲峰会々則規定と再発足について

諸宗との対比にみる

日蓮聖人の本尊觀

執行海秀

求道の人々シリーズ

△

意志の個人

川島本良

信仰体験談・人間礼拝と家庭の成仏

△

妥協なき信仰

日高白象

執筆のお進めと原稿募集

.....

38

34

29

21

19

10

4

3

真理はあたゝかい

釈尊と法華經との体用関係について

日高白象



曾つて九州地方を托鉢行脚の修行に明け暮れしてい
た或る冬の日のことでした。たまたま福岡県田川郡金
田町の人見という所で牧場を経営されていた本田量久

さんという御信者の家に逗留中、九州布教のため東京
より西下されて来た井上清純先生と遭遇することが出
来ました。

学に対する造詣の深さでは、在ながら日薄門下の中
でも有名すぎるほどの方でした。

この時、私は初対面でした。初めてあつた先生は瘦
身白髪、六十代の老紳士でした。もと天皇の侍従武官
をされたことがあつたというだけに、古武士のような
厳正な面影をとどめしていましたが、それにもかゝわら
ず、肌はすき通るように澄み切っており、眼には深い
温い光りをたゞよわせていました。

先生は大正の末期より戦前戦後を通じ終始一貫、法
華經によつて現代思想を普導すべく全国的に布教され
「如是我聞」等の厖大な著述もされており、法華經教

まだ二十代の血氣さかんであつた私は、このめぐり

あいの好機を逸すまじと、日頃疑問にいたいたいた教
学上のあらゆる問題を、次々に発しては息のつく暇も
なく、くいさがるよう尋ねつけました。それはも
はや質問の域ではなく、むしろ挑戦といったような態
度であつたかも知れません。先生は内心へとんでもな
い荒法師いでつかしたものだゝと苦笑しておられたか
も知れませんが、然し応け答えられる先生の物腰にし
ても言葉にしても、あくまで静かであり、あくまで
も柔らかいものでした。

冬の日射しはガラス戸を通して、縁側を暖かくつゝ

んでいました。お昼休み、先生は縁側に坐ってヒナタ
ボツコをされましたが、その中、疲れでも出られたの
か、コツクリ／＼心地よい居眠りをし始めました。舟
をこいでいる謹厳な老教学者、そのほゝえましい姿に
心ひかれて／私も先生にあやからう／＼と縁側へ出た時
気配を感じてか、フト眼をさまされた先生が、ニッ
コリされながら、次のようにつぶやきました。それは
「真理はあたゝかい……」

というひとことでした。ボツンとつぶやかれたひと

ことの言葉、それは聞きとれないほど低く細い声だつ
たのですが、蓋し当時の私の心を、これほど強く打つ
たものはありませんでした。いなそれは、浩かん難解な
仏教哲理を理論整然と解説する如何なる熟弁にも勝る
重みをもつていた。といつても決して過言ではなかつ
たでしよう。何故ならば、それまでの私は、いや私は
かりでなく大抵の人々もそうであるように、
△真理とは知性上のもの、感情のともなわない冷いも



井上清純先生遺影

とのみ思い込んで、真理を手がかりとしながら、悟りの境地を求めるのにキユウ／＼としていたからです。學問の仕方が既にそうである以上、修行の仕方もまた同様でした。お題目を唱えるにしても、あたかも高嶺にかかる実相真如の月を例ぎながら、お題目を地図とし杖とたのんで、道なき峻嶮を一步／＼とよじ登つていたようでした。

ところがそうした行にせよ学にせよ、追求すればするほど不安や苦惱を増すばかりであって、遂には一片の安心立命すらも得られないまゝ、中途にして挫折せざるを得なくなってしまうのです。愛なき真理、愛なき行、それは峻烈以外なものでもありません。悟りの境地は大いなる愛の世界であると標榜しても、愛なき手段によつては愛の目的地に到達されるはずはありません。手段と目的は常に一如していかなければならぬからです。

くあたゞかいように、真理もまた常に明くあたゞかいものであつたのです。太陽をはなれて太陽の光はありません。光なき太陽は既に太陽ではありません。太陽を体とし、光を用（働き）とするならば、体と用は一にして二、二にして一、本来不二なるものなのです。それと同様に、仏陀をはなれて真理はなく、真理をはなれて仏陀はありません。いや仏陀が真理そのものであり、真理そのものが仏陀のすべて（慈悲・命）でもあつたのです。

曾つて仏陀は、諸行無常・諸法無我・寂靜無染といふ三法印をはじめとして四諦・八正道・十二因縁・六波羅密、等々の無量の真理を説き示されました。然しそれは無常というその一句にしても、単なる真理の一片ではなく、實に仏陀の全人格を悉く投入したものであったのです。法華經では諸法実相・一念三千の法門が展開されていますが、このことについても仏陀の人格・

本来、真理は冷いものではなく、太陽の光が常に明

仏陀の慈悲というものを抜きにしては到底その実を得ることは出来ないであります。げに「一々文タ是真仏」、經文の一字／＼は悉く仏陀が、その全生命を吐露された全句であつたのです。お題目についても、その通りです。日蓮大聖人が觀心本尊鈔の中で、「釈尊の因行果徳の二法は、妙法蓮華經の五字に具足す」と喝破され、また四信五品鈔の中でも、

「妙法蓮華經の五字は、經文に非ず、その義に非ず、たゞ一部のこゝろのみ」と道破されている通り、お題目は單なるお經の文字ではなく、またその教理を示そうとしたものでなく、たゞ全く法華經一部（八卷二十八品）の軒轅である本門の八品（特に如來寿量品）に顯現された本仏釈尊のその久遠の因行と果徳、即ち久遠の命そのものであり久遠の祈りそのものにはかならなかつたのです。水南禪師は、その偏に、

「体に即する用を知といゝ用に即する体を寂となす。灯に即するとき灯が光で、光に即するとき光が灯であるようなものだ。光を体となし、光を用となして分けでは見るが、これは二つでなくて而も二つなのだ」と説かれていますが、まことに体即用、用即体、用をはなれて別に体があるのでもなく、またその体が用の主となつてゐるのでもないのです。もとより本仏釈尊をはなれてお題目があるのでもなく、お題目をはなれて本仏釈尊もありうるものではありませんが、こゝで注意しなければならないことは、本仏釈尊の奥に、

釈尊を釈尊たらしめている主なるお題目があるのではなく、またお題目の奥に、お題目をお題目たらしめている主なる本仏釈尊があるのではないということです。釈尊とお題目との体用関係について日蓮大聖人は、しば／＼母親とその母乳のたとえをもつて説明されています。まことに解りやすい適切なたとえなのですが然し往々にして母親を体とし母乳を用とみなしても、

母乳の奥に母親を見、母親がいなければ母乳はあります。ないという考えに堕ち入つたり、甚しきにいたつては母乳が体で母親が用ということは絶対にありえない、母乳房は母親の一部であり、母親あつての母乳ではないか、という考えに墮ち入りがちであります。

これは一見、もつともらしく思われますが、然しお乳を求めて火がついたように泣き叫ぶ我が子に、お乳を与えない母親が何處におりましよう。若し母親の乳房からお乳が出なければ、母親は赤児のために、代るべきお乳を求めて、氣でも狂つたかのように探し廻るはずです。こゝではもはやお乳こそ主であり、母親は用となつてゐるではありませんか。女體と母乳といえば、たゞその限りでは母乳は女體の一部分より排出されることはできないものかも知れませんが、乳のみ児に対した時、母親と母乳は、互に体用不二となつてゐるのです。事実、乳のみ児にとつては母親はそのまま母親であり、母乳はそのまま母親でしかないのです。

日蓮大聖人は、このたとえから末法の一切衆生を、しばく「末代の幼稚」と申されました。が、法華經を信する者は、あたかも幼児が母親を母乳と思い、母乳を母親と思うように、本仏釈尊それ自体にお題目そのものを見、お題目のそれ自体に本仏釈尊そのものを仰ぐのです。いやそういう信仰の人こそ、まことの法華經の行者と申せましよう。

曾つて、仏陀の説かれたひとことの教え、一片の真理にも仏陀の限りなき慈愛がこもり、仏陀のいのちが脈うつてゐるものでした。

「真理はあたへかい」

「真理は生きている」

この感動は、仏陀と真理を体用不二の関係に見ることの出来る者にこそ、はじめて与えられるものなのです。またこの見地に立つならば、まして法華經は仏陀が久遠の本仏として、その骨髓の全生命を、般智も慈悲も、力用も功德も、悉く顕発し尽して封じこめたも

のであるだけに、法華經をたもつことが、そのまま、本仏の命をたもつこととなり、お題目を唱うれば、本仏の温き血潮がお題目として我が全身に横溢し、

「法華經はあたゝかい」

「法華經は生きている」

という感動が、実感的に肌にも感ぜられて來るのです。そこにはもはや本仏と自分自身との間におかれて

いた遙かなる距離もなく、唱題の当所が、そのまま、靈山淨土の仏界となつており、過去、現在、未來の三世を通じて、生きとし生けるすべてのものに、在りともあらゆるすべてのものに、一本一草、一蘆一塵にまでも、限りなき価値が見出されて來るのです。

まことに法華經こそ、久遠なる仏陀の一切衆生に対する「大いなる愛の調べ」。お題目こそ「大いなる愛の祈り」なのです。私たちがこの大いなる調べに乗つて法華經を讀誦し、この大いなる祈りに乗つてお題目を唱える時、はかなき人間愛は、我れにもあらず、何

時の間にか、限りなき仏陀の愛に包摶昇華されているばかりでなく、その当所に宇宙的大ハーモニーの世界が現成しており、太陽も月も星も、そして流れる雲、こち吹く風までも、天地のすべてのものが、私たちと共に同じ「愛の調べ」をかなでており、同じ「愛の祈り」を捧げてゐるという雄大なる仏界の事実を認識する」ことが出来るのです。

そこには老若男女、貧富貴賤の相違もなく、業の深重、罪の輕重すらあるはずはありません。すべては仏子であり、三界はみな仏國なのです。

かえりみれば初めて井上先生の聲咳に接してより、およそ二十年の歲月が流れていますが、昭和四十三年一月五日、先生の第七回忌を迎えるに當り、この二十年の歲月こそ「真理はあたゝかい」という先生のこの一句の修証にあつたのではなかつたか、という思い禁じ難く、謹んでこの小稿を先生の靈前に捧げるものです。

諸君！鷺峰会をどう考える

△無限に涌き、無方に散る。それが本化地涌菩薩の姿だ。その一員なるを願つて青春を求道への熱情に燃えよう。本当の生き甲斐というやつを一刻も早く見出すために▽ 以下は日高上人を題んでの新春鷺峰学生座談会の一部である。

鷺峰会編集部

司会（川島） 本日はご多忙中を
本妙庵までおいでいただき恐縮で

会もその道程は多難に充ち、ある
時は街頭布教を、ある時は教学研
究会を開き、また断続的乍ら「鷺

峰」をでき得る限り努力して出版
してまいりましたものの、思うこ

と実現可能性は甚だ底いものが
ありました。

「新春放談」ということで、
鷺峰会関係の学生諸君にお集り願
つた訳ですが、七年目を迎えた本

本年は長所は高め、育て、悪い
ところは改めて、心機一転努力し
てまいりたいと思いますので、鷺

峰会今後の方針を決める大切な意義をも含めて、きょうの会を開きます。

はじめて顔を合わす者もありますから、自己紹介からまいります。

武内 学二、大阪出身の武内祥起です。

木下 学二の木下恵徳です。いまはとにかく何でもやりたい、何でも知りたい、というところで、学生時代に得たものを帰つてから自ら活用できるよう、努力したいと思います。生れは北海道です。

山根 鳥取県出身、高三の山根修です。近頃は創価学会など新興宗教も沢山で注がるに生活できなないので、街頭布教に参加したり、

大いに勉強しようと思つてます。

小野 群馬県の片田舎で生れた小野經夫といいます。家は寺で将来

續ぐ予定です。小さい頃から「一匹狼」ということばが好きでした

高校時代から身延山の行学講習会にはよく出席しましたが、今後共

鷲峰会のお役にたてたらと思っております。(学一)

堀内 私、東京都出身の堀内典男といいます。現在法華經が私の感情に非常に合つておると感じます

その意味からも布教に専念したいと思つております。(学一)

渡辺 兵庫県出身、学三の渡辺政彦です。本妙庵に来てもう三年になります。この三年本当に色々の

ことがありました。特別な形を持

たない鷲峰会ではありますけれどついて行くのが精一杯といった感

じでした。卒業まであと三月足らずというところにきて、今更乍ら自分

の至らなさを反省します。

小畑 岐阜県生れの小畑友宏です

高校を卒業して、とにかく立派な社会人になることを望んで懸命に努力したんですが、世の風当りは強く冷たくて(笑)単純な若者を受け入れてはくれません。本当に

色々やつてはみたんですが、いつも自分の思いとは反対の悲痛な結果

計りで、それからの逃避と一つには国防の意に燃えて自衛隊に入隊しました。二年間そこはなんと

か大砲の玉に当ることもなく無事過ぎましたが、今度は祖母の熱意もありまして六月以来婆娑の様を絶つこととなり、現在本妙庵に入つて身延山大学に通っています。

阪口 岐阜県出身、高二の阪口高行十七才です。今まで坊にて勉強も修行も疎かで、それに街頭布教にも行つたことがありませんでした。これじやいけないと思つて本妙庵に入り一石二鳥をねらつてます（笑）

日高 ご存知日高白象です。私はまず、在校生の志あるものがこうして月一回でも集り言いたいことをいう、抱負・疑問・不満なんでもぶつけ合いデスカッショソする

という機会をもつことが何より大事ではないかと思う。

司会 今迄いろいろ会合したんですけどなかなか長続きせずに終つていたようです。私もしばらくこんなと共に内外に行動したいと願つています。

前後しましたが、司会をさせて

いただく川島本良です。

まず昨年春から武内君達が山門布教を統けているそうですが、それをひとつ話して下さい。

武内 昨年四月からです。はじめましたのは、本山の藤井上人が提唱され熱心に指導して下さいまして、学生の方は五、六人示し合わ

してほとんど毎日のように山門の前でやりました。四月から八月までは頂度団参シーズンで、毎夜必ずどこかの団体が泊つておりますからそれを対象にした訳で、多い時には三百人位山門の前に一杯で、激文もいただきましたし、町の人々もとても好意的で大へんな反響でした。

しかし説法する学生は一部に限られてしまい、はじめの上手に話せるよりも多くの者がマイクを持つようにならうスローガンは果しませんでした。ただ段々に学生が感心を高めているということははつきり言えます。

司会 とても結構な実践です。普

通なかく行学兼修はむずかしいところです。鷲峰会の生き方としても、今迄街頭布教と講習会というように兼修の形をとつてきましたが、これから何かテーマを決めての勉強をここでも開きたいと思つてます。

山門布教から街頭布教へと話が進みますが、実践面での希望といふことで……。

木下 街頭布教が今のところ私の

感じでは身延中心で、それも本山の街頭布教は日帰り位しかできません。当然身延山を中心とするあ

る円形に限られてしまうと思うです。ですからそれよりも休暇を利用して本山の本隊が行く程にな

つたらと願いまして、学生の自発的行動がそななるとどうしても必要ですね。それにいまの街頭布教は学生にマイクを持たせませんしどうしても学生の布教隊とは言えません。

武内 私は昨秋の学園祭で写真展をやつて驚いたんですが、昔の布教隊の玄題旗二本の片方には必ず身延山大学・高校布教部と大きく書かれていたことです。昔はあくまで学生を主体にした布教部布教隊であつたかということを伺える訳ですが……。

日高 それにはこんな過程がある街頭布教隊がなぜ起つてきたかといふと……。私が身延に入つた

のが昭和三十一年十一月三日で、

その年の十二月一日から丈六堂で成道会唱題行をやり、学生は延べ七十人にもなつてその勢いで正月

には寒行がはじまり、三月春休みには学生有志が手銭手弁当で伊豆

を擊鼓した。その夏に矢張り学生だけで鎌倉を歩き、これが三十五年になると本山布教部が動いて、

第一回身延山街頭布教を静岡に起して大成功をおさめたのです。

この時学生がやつておつたことを本山が活用するのであるからと、いうので、玄題旗に身延山布教部と身延山大学・高校布教部といふ名が入つた。それがずうつと度重ねられるうちに学生という名はけ

ずられてしまい、同時にマンネリ化して反動として別動隊が起る」とともなった訳です。

木下 去年の夏は北海道の街頭布教を学生だけの自發的行為でやりました。

小野 しかし山門布教も街頭布教も一部の人達に限られてしまつてその他の面でも学生の活気というのがどうも弱いように感じてなりません。

堀内 自分は身延山に来る前は理科を志して、宗教面はただ感覚的にいいなと思つて行学講習会に何回か出席した位で余り深い感心はもつていませんでした。所が菩提寺の和尚さんが急死してはじめ

て出家を発願したのです。科学から宗教へというのでいろいろの問題も出てきますし、とにかく勉強

しなければならないと感ずる段階で、街頭布教という積極的行動に出るまでにはいきません。しかし

とても大事なことだということははつきりわかるんです。

山根 若い時しか本当に自由に活動できないし、しなけりやならない

いというのが実感です。

司会 誰でも良く言うことですが学生時代の理想と、卒業後の現実とにえらいひらきがあつて、苦労

するとか、理想は理想だからといつてなくしてしまっています。理

想はあくまで貰く意気が欲しいと

思うのですが……。

二、三名 生活がかかつてきますからね（笑）

木下 私は在家の出ですが、なるべく自分の時間をつくつてまずお

寺にしばられる前に、街頭布教とか、一人でどこでも歩いて辻に立つたり、農繁期だった農家人達の休み時間を利用して説法したりしたいと思つてます。

お寺に対する疑問一つにしても三衣一鉢という坊主が家に鍵をかけなきや安心できないということにえらいひらきがあつて、苦労です。

渡辺 それは経済的にめぐまれ過ぎたからです。道心の中に衣食あり、という大変な事実が本当はあ

るんですか、その点では落ちるとここまで落ちたと言えるでしょう。

日高 宗門の現状を嘆き、寺院の現状に不満をいだくことも結構。しかしそれを訴えたところで仕方ない。結局それらも自己反省の材料となってくるだけです。最後は自分自身しかない。自分が宗門に不満をもつなら、では現在の宗門に対して自分は何をするか。宗門の仏法は確かにここにきて断絶している。日蓮宗はないとも言えるこの歪められた宗門の中に生き乍ら、我々は大聖人の精神をどう顕現していくか、というと矢張り自分自身しかない。

だから街頭布教も道路説法も大

いにやるべきであるが、訴えることか自分が学生であるということに甘えての欲求不満をぶつけてはいけない。学生をぬきにして、一出家として、日蓮宗の門下として大聖人の安心を大衆にお伝えするという責任をもたねばならない。そこで街頭布教も道路説法も日頃の探究ということが一番問題になつてくる。出家というよりは一人間として求道し、しかも仏祖の代弁者であつてはならない。

かつての布教活動第一線の学生達も地方に帰ると、既成教団に飼育される形となつてしまつたようだ。確かに見事というほど学生時代には布教活動もしたが、その時

代の生活態度、即ち道念というのが一番の問題だった訳で、矢張り学生だという立場に甘んじた結果いざ一ヶ寺の住職になると、知らずに既成寺院ズレ、グルーピボケてしまう。学生だからできただ、社会人になれば当然社会の制約をうけるということになる。これは今後の皆の大問題だ。小野 飼育されるというより、こちらから妥協してしまうんではないでしようか。

日高 西方言えるでしょう。どうしても壁につき当る、その時言う言葉がさつきも言った「生活がかつていて」ということだ。

木下 生活がかかっているという

のは、布教に生活がかかっているのでなければなりませんね。

司会　何としても興学布教の情熱の火を消してはなりません。そこで驚峰会当面の問題と今後の方針に話をしほつてまいりたいと思います。

木下　まず驚峰の編集にも関連して、永続させる為には理想として終つてしまふかも知れませんが、会員を一ヶ所に集めるということ例えれば本妙庵にです。

小野　地方青年との結びつきを密にすることだと思います。

日高　驚峰会の延びなかつた欠点は……。途中で断絶したということもあるが、惟にしてこちらが

甘んじておるのだけれど、雑誌を

出してもらえばいい、途中で切れてもいい、という声がとても強い

それよりもこちらがに向かなかつたということにある。読者のところにおもむいて、布教なり、講習会なりを全くしなかつたということです。

小野　身延山青年行学講習会によく出席しましたが、それが私にはポイントだったような気がしています。

司会　以上の話から、またかねて

からの計画から、今後の方針として次のようなことを改めて提案したいと思います。

○驚峰の先輩後輩有志一同によ

○地方青年行学講習会。

日高　地方の青年運動をどんく

起さねばならない。これは特に先輩達に期待するところですが、在

家人達でも要望しているんだから、こちらはそれに応え、向うは

その会に対する責任をもつてもら

う、という形でそのグループ造りをまず起し、そして今度年一回身延で開くという時にはそこから選抜代表者を派遣する、ということ

です。

武内　身延の行学講習会のよう

ものを地方で読者の線に添つた会として行なうことは非常に良いと思ひます。これは外に向つてのこ

とですが、同時に身近かな者に道風を宣揚することも急務ではないかと思います。

日高 もちろんそれもあるでしょ。我々がこうして組織をもつてやろうとするのは僧伽ということだと思います。単なる一般社会の組織力というのではなくて、僧伽の尊さというものを認める。そのためお互のデスカッショングであり、団結であろうと思う。仏法僧の三宝から少しも離れないことです。そしてこの中でお互に人生最良の友を見出せばよい。それが僧伽の原形で、これをぬきにして鷺峰会も本妙庵もないのです。

小畑 現代文明の粹を集めた航空

機等の機械の中で仕事をしていた私にとって、それとは全く逆のむかしから変らぬ人間追求の道に入る出家には瑞分抵抗を感じて素直にやつていいけるか心配でした。それが何もわからぬまま九州の滝にやられて、日高上人や小寺・木村・川島さんなどの先輩に、理屈ぬきの実践と、仕事の休みにかわす討論のうちに、——今から考えてみれば大変な抵抗を試みていたのです——自分も何とかしなければならないという信仰実践のアイトとでもいうのでしょうか、自然に湧いてきました。

そこで求道心というものは求めるにひとりで出てくるのだ、と強く感じた次第です。それと人との結びつき、めぐり合います。何もわかりませんが、鷺峰会の発展、本妙庵僧堂づくりは、自己づくりに他ならないと思つてます。司会 とくかく皆様方の奮起努力を願うところです。結集の地は本妙庵とし、このことは一応鷺峰会先輩諸兄の了承・賛同を得ました。本日の話も皆様方との特別な検討を待たずに自然と、結集大会・地方講習会の必要性という意見につきましたので、これを鷺峰会再発足の基本路線としてまいりたいと存じます。

そして日高上人の言われたよう

に、他を云々する前に自己を常に

みつめ、常に磨き、常に反省する
ということ、それは学生というよ

り、一出家・一人間として一番大
切な態度ですから、きょうの良き
収穫として一同十二分に肝に銘じ
たいと思います。では本日はこれ
で閉会といたします。

★ ★ ★

座談会は私如き弁説を大の苦手
とする者にとって、甚だ貴重な体
験となり、人前で話し論じ合うこ
とに、欠点と至らなさをつくら
と感じさせられる。所が論議で注
意せねばならぬことは、論は論に
終りがちだということである。た

とえ人皆感嘆の名言を弁じたとて
も、論のみに始終してはつまらない。

私の知人に求道心強い在家人
がいて、書もよく読するが著作内
容だけではわからないからといつ
て著者の所へ出掛る。

「いくら偉そうなことを書いた
って会ってみなければやわかりま
せん。会ってしばらく一緒に生
活したり、話を聞いて、あんな
程な、どうなずける所までい
かない」と気が済まないんです」
どうも常人にはでき難い。暇のか
かる勉強で、森の聖者と言われた
エマーソンみたいに生活費が無く
なれば五日でも十日でもアルバイ

トに行く。

今の人からみれば「あいつは変
人だ」ということにもなるが、

私はこの人の真面目な態度に随分
得る所があると思えてならない。

祝導はまことに多くの經典を末
代に残される結果となつたし、キ
リストもバイブルにはじまり多く

の神学書を生む素因を生前に持
つていた。しかし經典聖書を單な
る哲学書として読んでも我々の生
活には何も生きてはこないはずだ
というのは、同じ人間としての聖
者たちの行為に、人格に胸うたれ
るからではなかろうか。古人云く
「論より証拠」。

△本良△

鷺峰会会則規定と再発足について

早いものです。昭和三十七年身延山学生有志によつて結束された鷺峰会にもまる五年の星霜がたち發足以来七年目の春を迎えました。処女航海にも似て、明日の本化青年の理想的グループを目指し乍らも多難に満ち、とかく不連続不徹底な動きは時々消滅するやも知れぬ不安定さを今に持ち続けておられます。もとより人員の多少、活動の広狭は第二義にて、ここに集う人々の眞の日蓮門下たらんことを目標にしてまいりました。

一つ機間紙「鷺峰」をとつてみても、発刊不可能を度々重ねまし

たが、多忙の日高上人一任という形に依存の結果無理を來たし、陰には鷺峰会を正式発足しなかつたための至もありました。

時移つて周辺の態度も変り、新たなる結束をもつて正法興隆に奮起せんの心募り、鷺峰青年僧俗に期待する人々の声を各處に聞くに及んで、本年を鷺峰会再発足の年としたいと決意するものであります。ここに鷺峰会々則を定めて諸賢のご賛同ご協力を願う次第です。

鷺峰会会則

員の積極的な受動体勢を熱望しますまた毎年鷺峰例会として、春彼岸後に青年僧を中心とする教学研究会（三泊四日位）を、八月には青年信徒を中心に講習会（四泊五日位）をそれと予定し、諸賢の参会を願つて止みません。

会則は以下に記するところのものです。紙上をもつて報告に代えさせていただきます。

方の法座布教・青年講習会を予定しておりますが、これには地方会

第一条 名 称

本会は「鷺峰会」と称する。

第二条 目的

本会は日蓮大聖人の教えに則り、三宝帰依の実をあげ、人材を養成し、立正安國・三界仏國の瑞相を演現するを以て目的とする。

第三条 事務所

本会は本部事務所を一山梨県

身延町波木井、醒悟園本妙庵
」におく。

第四条 事業

本会は目的達成のため左の事業を行なう。

(1) 人材養成に関する事業

(2) 布教伝道に関する事業

(3) 文書伝道に関する事業

(特に機関紙「鷺峰」発行)

第五条 役員

本会は次の役員おく。

会長一名・副会長二名・理事若干名・会計二名・会計監査二名・顧問若干名。

役員の任期は三年とし、再任はさまたげない。

第六条 会員

(1) 本会の目的賛同者を以て会員とす。

(2) 会員は、特別賛助会員・贊助会員・護持会員・一般会員とする。

(3) 特別賛助会員は鷺峰誌代の他

年間壹万円を志納する(分割

志納可)

(4) 賛助会員は鷺峰誌代の他、年

間参千円を志納する。

(5) 賛助会員は鷺峰誌代の他、年間壹千円を志納する。

(6) 一般会員は鷺峰誌代を納入する。

(7) ▲附則▽本会の会員以外でも鷺峰を講読することができる

第七条 運営

(1) 本会の運営は理事会による。

(2) 理事会は会長の招集により、年一回の定期総会並に臨時総会を開催する。

(3) 本会の経費は会費並に寄附金

を以て充当する。

第八条 規則変更

本会会則の変更必要ある時は理事会によつて決定する。

日蓮聖人の本尊觀

一特に諸宗と対比して一

(横浜市井土ヶ谷法華經講鑑の集いでの講演より)

立正大学教授 執行 海秀

△高野山西塔の大日如來像▽

題は主として、日蓮聖人の本尊觀ですが、ご承知のように日蓮聖人の本尊論は今もって種々の問題があります。ここでそれを一々あげると大変時間がかかりますから、私の信じているところを述べることといたします。

一体宗教は皆本尊というものを立てる訳で、キリスト教では本尊とは呼ばないかも知れませんが、信仰の対象として神をたて、仏教では信仰の対象を本尊と言つております。そこで私達の信仰の対象を仮に本尊だ



ということばで表わしますと、日蓮聖人は信仰の対象をどのようにお述べになつてゐるか、ということになります。

むかしから大きく分けますと、久遠実成の釈迦牟尼仏を本尊とする、という説と、日蓮聖人がしたためられた大マンダラを本尊とする、という二説になります。そして前者を仏本尊、後者を法本尊と分けています。諸説はありますが、久遠実成の本仏を本尊とするといふ時、それがどのような性格かと申しますと、開目抄に、「法華經以外の宗旨の本尊は、皆本当の仏を知らないところの本尊である」と述べられていますから、まず日本佛教のいろいろな本尊と比較してみてまいりたいと思います。

まず真言宗では一應大日如來で、真宗・淨土宗は阿彌陀如來を本尊とし、禪宗、中でも道元禪師の主張されたところでは釈迦牟尼仏を本尊としています。日蓮聖人以前の佛教では、大日如來・阿彌陀如來・釈迦如

來を本尊としていますが、日蓮聖人は道元の釈尊本尊には何等触れておりません。それはほんと同時代の二人が、地理的關係からお互に知らなかつたためと思われます。そこで問題となりますのは、真言の大日本尊と法然上人の弥陀本尊ということになります。

一体佛教は本尊を必要とするしないかという問題は昔からあるのですが、キリスト教が信仰の対象として神を認めるのに対して、佛教では一般に無神論だと申しておき、神を認めない立場にたつてです。神は認めないが仏は認めるのではないか、というかも知れませんが、要するに人間でない仏といふものは認めない。人間としての仏は認めるけれど、人間に非ざる仏は認めないというのが、今日の通佛教的立場の考え方です。この点からは信仰の対象をもたないとも言えます。つまり佛教は人間自身の問題を取り組んで、自己解決する、いわば哲学でもあり、倫理でもあり、厳密に言えば宗教と言えるかどうかということさえあるのであつ

て、宗教そのものが問題となつてきます。

今日の宗教学と申しますと、日本ではキリスト教がその対象となつております。東大あたりでも、宗教学の主流はキリスト教にあります。仏教には無い歌です。では仏教は宗教のうちに入れてないかと言えば、その点はどうもはつきりしませんが、仏教という学問は、インド哲学の中に入り、インド哲学の中に仏教という信仰が研究されている、という具合です。学問としては宗教というのはキリスト教とされて、キリスト教について宗教学は奪われているようなものです。

仏教というのは何か。日本には天台・真言・浄土・禅・日蓮というようないろいろなものがありますが、真宗のようです。仏教の主流は真宗だと決められていて、その中で仏教を代表する学問は何であるかと言うと、真宗のようです。仏教の人達は信じていて、仏教のように流れていないと思うんですが、その上層階級や知識階級の人達が、宗教と言えばキリスト教だというような頭をもつてきているので、いわば神の無い仏教は宗教で教と言えば真宗、では他の宗派は何かというと、正系

の仏教ではないんだ、という考えになつていて、それが今日一般的な体勢ですが、日蓮聖人はこれとつまり日蓮の提唱する法華經であり、これが本当の宗教で、その他のものは皆本当の宗教ではない、と言われ、日蓮聖人の信ずるものを仏教、さらに宗教という線で結ぼうとなさるのですが、今日一般的な体勢は、宗教の直流はキリスト教に来て、その枝葉が仏教に来て、そのまた枝葉が日蓮宗に来ていているという、末の末の枝葉のような流れにみられています。果してそれが学問的に正しいか、否かは知りませんが、日本では仏教がほとんど勢力をもって、キリスト教は一部の上層階級

いう考え方になつてます。そこで仏教は無神論といふことになつて、またこの無神論というのに魅力を感じて研究する人もあります。

今日の様に科学万能の時代になつてまいりますと、人間に非ざる神の存在というものは迷信で考えられないことと言つて、仏教こそ本当の宗教だとする人も沢山あります。それが買われてかえつて外国にわたつて広まる、禅のようなものがそれです。禅が宗教であるかどうかは別として、仏教の代表は禅だといつまでに

外國では理解されるようになつてきましたが、最近では仏教の中に禅のほかにもう一つ日蓮というものがあると考へる人が出てきました。これは善につけ惡つけ、どうかはかりませんが、創価学会の進出です。

日本の宗教会におけるキリスト教と対立して創価学会

の信仰というものが、結果的に強く評議されているようす。そこでキリスト教と対決するものは創価学会だ、日蓮の信仰だと言われています。ほかのものは怖

るに足らないけれど、創価学会だけはキリスト教と対決し得る宗教であると、アメリカ当たりから日本にやって来て、大々的に創価学会の信仰を研究しようとしています。ということは同時に、根本的に日蓮聖人の信仰を研究しようとする動きが最辺ではでているのです。これはただ結果的にそうなつただけのことですが、では一体創価学会の本尊は何か、ということにも関連してきます。

まずその前に單的に、大日如来と阿弥陀如来と釈迦如來の三つが本尊の対象として、日本の仏教では浮び上るわけで、これから先に話してまいります。これを学者はいろいろな理屈をつけて説明しますが、むづかしい説明はぬきにして、私達が常識的に考えて、どうゆふうに理解するかが問題です。

まず真言宗は全部大日如來を本尊にしているというわけです。そこでキリスト教と対決するものは創価学会だ、日蓮の信仰だと言われています。ほかのものは怖

日如来が本尊で、信仰の対象であります。一般的民衆の世界には、大日如来はそれほど強くでていません。どちらかといえば、不動さんとか、何々明王といつた諸天善神という、ずっと民衆におりてきただの方は、大日如来ではなくってきています。この辺りでも一番信仰の強いのはお不動さんで、この方は十界のうちのどこに置くかというと、とても仏・菩薩ではないが人間よりは少々上、といった日本古来の神々といったところになるのでしょうか。一般的には信仰の対象となっています。ところが、学問的・理論的には大日如來が本尊となっているのです。では大日如来はどんな性格の仏かというと、法身の仏といって、真理と一つになつた仏、單的に言えば真理そのものだというので真理を人格化したものといいます。そして、その大日如來は、弘法大師のことばで言え、「遍照金剛」、つまり普ねく真理の光が照らすということで、大陽信仰と結びつくかも知れません。それはむかしは大陽信仰

があつて、大陽が普ねく一切を平等に照らすというところと、大陽なくしては生存できないという考え方、或は大陽は万物の生命のもとであるということ等が結びついて、大日如来の真理を大陽を象徴していくものと考えられるむきもあるからです。その真理とは科学的・学問的な真理であるのか、否かとの問題もでてきますが、学的な真理も含んだとしても、人間が生存していくうえに、人間が従わなくてはならない絶対の真理、という意味が、大日如来にあると思います。世の中は変化するけれど真理だけは変わらないのだという考え方方が一般にありますが、真理は不变である、一国に通じて他国に通じないのは真理ではない、むかしは通じたが今は通じない、今の時代は通用するが今後将来の世には通用しないという真理では駄目で、つまり時間的には永遠、空間的には普通という二つを折り混ぜて、その中に動かないもの、これに従わなければ自然界は動いて行かない、自然界はそれを軸として動い

ているのだ、という考え方で、それを名付けて大日如來と言つてゐるのです。しかしそういう眞理は一つの理論であつて、それがどこかに事として存在するといえは問題です。事というのは仏教語で、仏教では理・事を盛んに使います。理というときは、一つの原理・

眞理でこれは理論であつて人間の頭で考えたもので、自然・社会はこのようではなくてはならぬという結論を頭の中から描き出していいた理論ですから、これが天地自然界に存在するとは考へない。つまり実存とは考へない。そういう考え方の方が、法華經の立場にたつた天台の主張で、それは理である、理は絶対の眞理であるかも知れないが、事々物々の世界は変化の世界であつて、それが実相であるといいます。実際の理論は理論に従つて、事々物々が動かなくてはならないけれど、現実にその理論がどこかに存在する、本体の世界があるとはみません。法華經は諸法に実相があるとするのであつて、実相と諸法とは別のものではないのだ

という立場にたつのが、法華經の立場にたつた天台宗の主張であつたのです。そこで理と事をたてるけれど理は絶対の眞理である、それはなくてはならぬが現実の諸法の理論通りには動いていない、迷いの世界変化の世界であるといいます。

これに対し弘法大師は、大日如來は單なる理ではなくて、事として存在するという立場にたつ。そこに強い信仰がでてきます。天台宗では理がともすれば観念的になり、大日如來なるものは当然存在しないのだということになつて、そう考へれば信仰の対象とはならなくなります。そこで一応便宜上それを人格化して完全なる如來が存在しているのだという我々の要請として、客観的に如來というものを立てる訳です。しかし、これは現実には要請に答えてでてきた幻の存在で信する人には存在するが、信じない人には存在しません。弘法大師の考へられたのは、それでは強い宗教にならないので、事々として如來が存在する、どこかと

言つても、それは我我の凡眼にはみえない信仰の世界でとらえられるというでですが、要諦の如来でなくしてそれが根本となつて宇宙が動いているという考え方をしています。そうするとキリスト教の神に近づいたことになります。キリスト教の神と同じ様な性格だと私は思います。

真言の大日如来は真理を一つの法としてみるのではなくして、存在としてみていくことをするのです。す

る考え方です。

るとそれは人間ではなく、人間を含めた一切の根源となるもの、神あって宇宙ができたので、宇宙があつて神ができたとはいわないという理論になります。まず最初に大日如来があり、人間を教化する為に、人間に相応する姿をとつてインドにでてきたのがお釈迦さまです、お釈迦さまは大日如来が人間の形をとつてインドに生れてきたといいます。法身の如来が衆生の機根に応じて出てきた應身の仏だというのです。また大日如来は不動如来となつてもでできます。衆生の好むところは従つて出てくるのです。日本國のために天照大

神となって出てくるし、中國には孔子とか孟子、といふうに全世界の根源の仏様が大日如来で、キリストもマホメットも化身ということになります。根源の世界に法身を見るわけです。その法身は單なる理ではなくて、事として、存在として信じようとするのが密教的で、事として、存在として信じようとするのが密教の考え方です。

キリスト教とのちがいは、悟れば我々人間一人一人が大日如来だ、というところがちがうわけで、ここに仏教的な色彩があります。人間と隔別の世界に大日如来を置いているようだが、それは悟らない迷っている人達にそういう教化をするのであって、信仰に入り悟った世界では、大日如来は自分そのものだということになります。これが密教の勝れたところというのです。自己即大日、大日の他に自己なく、自己の他に大日なしです。人間絶対という考え方です。そして更に悟つた世界では、大日如来は自分の除だと逆転してしま

ます。そこがキリスト教とちがうところでキリスト教では神と人間とは次元を異にしているのですから、俺は天にまします神様だ、と言つたら大変なことになつてしまします。不動さんを崇んでいたのは、まだ大日如来の教化を受けていた迷妄の人達で、お詣りさせなければならぬ人達で、神様がそうさせていたので、本当に悟った人は成田さんにお詣りする必要はない。不動即自己、大日即自己であるというのですが、そこまでなかなか悟れないので拌むことになります。

しかし密教本来の考え方からいえば、自己即大日で弘法大師によれば自己が宇宙の中尊になるわけです。全ての世界は自分を中心にして転開している、といふところに、これは真言宗ではありますか仏教の特色がみられます。本尊を拌む対象としてみた時は大日如來の前にひれ伏しているのですが、本当に悟つてくればひれ伏す何もない、自分が本尊のまん中にすわつている。諸仏諸菩薩一切のものは自分に仕えている家来だ

といふことになります。釈迦も弥陀もんみな俺の召し使いだ、自分を中心に世の中は動いているのだ、という尊的な考え方になつてくるのです。これが密教の哲学的に言えば勝れていたかも知れませんが、一步まちがえば危険なものとなるところです。そういう悟りを開く人は余りないので、弘法大師はその悟りを開くために入定して、即身成仏し、大日如来となつたというところから、大師信仰が起つてきます。

このように真言では、本尊として仰ぐ時には何でもかんでも迷つていて、人には皆本尊となり、キツネでもタヌキでもみな本尊で、その人を救うために大日如来がキツネになつたりタヌキになつたりして出てくるという考え方で、さて悟つてしまえばそのようなものは一切本尊ではなくなつて、自分が本尊になるのです。

以上は密教における学問的なものでありまして、実際に真言の加持祈祷といったものはどうしても哲学的理論から出できません

求道の人々シリーズ　へその一

意

志

の

川

島

本

良



今は昔、神山ヒマラヤをはるかに望む、西天インドの夕暮れの道を、満面に喜びをたたえて友のもとに足急ぐ、一人のバラモン僧がありました。

その頃の中インド・マカダ国は新興王国として、武力も富も他国に勝れ、日の出の勢いをみせておりました。

主都王舍城から数里の村に、博識のほまれ高い両親のもと、舍利弗は誕生したのです。そしてまつたく幼くしてその頃の学問を全て修めて世間を驚かせましたし、よき若者に成長すると、その容姿の美しさに乙女たちはひそかに愛の思いをよせすにはいられませんでした。そのまま学者で一生を終るとしても、名声は国内外に響いていたにちがいありません。しかし多感な青年でもあつた彼は、情に走ると人生の欲のおもいはどこまでも増長し、それを理性は根本から破壊しようとして、一つの体に二つの心が争い、自己の矛盾、自我の分裂に心底悩む日々が続くようになりました。今まで学んだあらゆる知識も、この青年の悩みと一緒にいやす良薬とはなりませんで

した。

舍利弗の住んでる村落にはど
近い寒村に、舍利弗と同じような
悩みをもつ、クリタという青年が
おりました。クリタという名は村
の名もあり、村の名を自らの名
とするほどの家柄も、年令・才学
も舍利弗と伯仲の間柄で、兩人は
大変気が合い、無二の親友となり
ました。この青年こそ後半、彼舍
利弗と並び称せられた仏弟子目蓮
その人なのでした。

二人はいつも相い会って、共に
遊び、共に語り、互に敬愛してお
りましたが、とあるにぎやかな祭
の夜のことでした。それは人々に
とつて、とても楽しい一夜なので

したが、祭りのさわぎが頂点にな
るころ、それがにぎやかになれば
なるほど、人々の楽しげな姿をみ
れば見るほど、二人は悲しみの思
いを深めずにはいられませんでし
た。舍利弗は一人森に入つて樹下
に坐し、溜息まじりにつぶやきました。

「ああ、人々は空しい歡樂の酒
に酔い、嘆きのこない前のほんの
はかないひと時の夢をむさぼつて
歌つたり、踊つたりに余念がない
もう百年を待たずしてあの大勢
の者は誰一人としてこの世にはい
ないのだ。しかし他人事ではない
自分は矢張りあのような浮世の樂
しみを夢みてはかない日を送つて

いる。ああ愚かだ、あさましいこ
とだ。天人のかなでる音楽に心を
奪われているうちにも、人間の嘆
き悲しみは遠慮なくやってくる。
もう自分は人生に何の欲すると
ころもない。只、言い知れない怖
しさ、悲しさのみがある。この思
いが胸一杯になって、どうしても
はらうことができないのだ」
いつか目蓮も近くに坐り同じ思
いに涙するのでした。静寂の森に
只二人は、いつまでも語り合い夜
の白むころ出家の道を求めるよう
決定するに到りました。

舍利弗が持ち続けていた數年来
の苦惱は、この歡樂の祭典に会う
に及んで、口火を点ぜられた花火

のように戦慄しました。彼は人々の狂態をあざましいと見るとともに、己れの愚かさを哀れますにはいられませんでした。人々の狂態は鏡に映った己の姿である、今まで薄ぼんやりと心の上にながめていた自己を、今やはつきりと人々の上に見た、もう片時もじっとしてはいられない、と早速父母に出来を願い出ました。しかし一言のもとに反対されました。肉親も、地位も、名誉も、学識も、全てを捨てて乞食沙門に身を転ずることは、両親の期待を一切かなぐり捨てることでもありましたから。

しかし舍利弗の求道心は一命をかけてもとすさまじく、七日の間

断食をして、ついに許を得るに至ったのです。生れつき意志強固な舍利弗は、終生真理探求に当つては、すばらしい判断力・理解力と岩をも貫く強い意志をもつてつき進み、意志の人、智慧の人と尊称されるに到るのです。

夕日をあびてきようの喜びを目蓮に伝えようと、思わず駆足になる舍利弗に、青年時代の苦しき日々の思い出が明滅し、またきょうの良き日を迎えるまでの求道の日のことがらが、走馬灯のように思い起されたのでした。

「今日の我々の行ないは、過去に定められたことであり、我々の責任ではない。責任を持たないから罪の報いを受ける理由はない。従つて悪いことをやつたと悔むの

の毎日ではありますたが、今となつては思い出と現れ、思い出と消えようとしています。

それは、それは長い空しい修行

の毎日ではありますたが、今となつては思い出と現れ、思い出と消えようとしています。

てもよい責任を負つて苦しむこと

である。道は我々の努力によって
求めて駄目である。八万劫の生
死を経れば、苦しみ尽きて自ら悟
りを得る。

それは結局一種の宿命論で、私
達の悩みを解決してはくれなかつ
たと。

きようは何と良い日なのだろう
舍利弗は思いの中できようの出来
事を繰り返します。日蓮と、「師
の説は充分に解脱の法を説いてい
ない。何としても善師を求めなけ
ればならない」と苦つてから幾月
日か、この日舍利弗はついに善師
にめぐり合うことを得たのです。

玉舍城外を一人行く舍利弗は、

思わず足をとめてその人をみつめ

ました。その遊行者は粗末な衣を

つけてはおりましたが、鉢をもち

静かに歩く姿に、言い知れぬ崇高

な靈氣を感じ、敬いの思いと、求

道の念にかられて、舍利弗はその

後に随つて進みました。そして、

後に喜びました。今まで曇つ

て解くよしもない胸は一時に晴れ

上つて、心の纏は洗われ、喜びは

五体に行き直り、清浄法眼を得た

のです。心の中で叫びました。

「人は皆我を執じて輪廻の源を
造つてゐる。もし我の想念と、我

の目的となる相対的世界觀を除き

去つたならば、さながら日光の闇

を払うように心の開明を見るであ

ろう。私のきようまで学び来つた

ことは、皆邪の見解であつた。宿

命説も、自然發生説も、梵天の創

造説も皆邪見である。今や因縁法

「遊行者よ、あなたはどのよう

な方ですか。あなたの師は何と
言われますか」

「私の師は釈迦族の子、道を悟
られた大沙門です。私はその弟
子馬勝です」

「どうか何なりとお教え下さい」

「諸法は因縁より生ずると、

世尊は説きたまえり。

諸法を断じて涅槃に入ること
を、大沙門は宣説したもう」

舍利弗は、この偈を聞いて、踊

る計りに喜びました。今まで曇つ

て解くよしもない胸は一時に晴れ

上つて、心の纏は洗われ、喜びは

五体に行き直り、清浄法眼を得た

のです。心の中で叫びました。

を聞いて、我が胸に無我の智が開けてきた。ああ今こそ眞の道を見た」と。

もう日は西にしづみ、夕闇の迫る頃、舍利弗は目蓮のもとに着きました。目蓮は友の姿の暗々として、ほとんど別人のようなのに驚いて故を問うと、彼は馬勝比丘に教えられた偈を誦し、目蓮も彼と等しき心境に達したのでした。

それから弟子二百五十人を連れて仏門に身を転じ、竹林精舎に釈尊を訪ねて、忽ち教團の主力となつた話は、ご存知と思います。旧師サンジャーヤは、このショック

で死に至ったと言われ、二人の入門は、大反響を呼んで、仏門に入る者後をたたず、國中の男子がいなくなるのはなかかと憂いられた、という話も有名です。

さてここで遡返ということがどんなに大切かを私は学びます。しかしより大きな遡返は求道心の強さに比例するとも思われます。素直さを失わない意志の強さとも言えましよう。

「あの部屋にダイヤモンドがかくしてあるから探してこい」と言われて、一時間ほど探した者が、「ありません」と言つたら、「いやそんなはずはない、もっと探すんだ」とやれば、「そうかなあ」

と思い直してまた探します。所がもし、十年間探し続けた者が「ない」と言う時、それは確実なことばとなります。そこで「そうなんだ、そんなものはありやしない」と言はれて、ハツと帰るということが、たとえ話にありますが、私などどんな名言に触れても、「そりやすはらしい、だけどもつと感激するものはないか」と、思いのうちに停ってしまいます。本当に命がけで求め続けた者には、たとえ一偈でも、舍利弗・目蓮のように仏陀の境地にまで行くことを、この二人に、また法華經の「一句一偈、當得作仏」の文に学び度い

妥協なき信仰

人間礼拝と家庭の成仏 ▾その三▽

日高白象



妥協なき信仰

出口さんの一家が、先祖代々の
念仏をして、法華經に改宗し、日
蓮宗蓮華寺の檀家となつたのは、
明治四十一年のことでした。

改宗を悲願して来た主婦のチエ
ノさんは、もう三十二才になつて
いました。思えば明治三十一年二

十二才で出口家に嫁入つて以来、
夫の親戚一党からは悉く、
「お題目を唱える者は雖縁せよ」
と指弾され、夫の両親からは、
「親の生きている間だけは……」
とお題目を唱える口すら封ぜら

れながら、忍耐に忍耐を重ねて、
何と十有一年、遂に時きたつて一
家改宗の晴れの日を迎えることが
つたということは、比較するも恐

れ多いことながら、この過然の契
當に、チエノさん自身、いゝ知れ

ぬ感動が身中にあふれていたこと
でしよう。

それ以来、チエノさんは誰はば
かることなく朝に夕に強盛なお題
目を唱えはじめました。それはあ
たかも、これまでの十一年間の空
白を、一挙に取り戻そうとするか
のよきな強盛さでした。

当然、親戚一党的怒りはさかま
きました。チエノさんの信仰が強
盛であればあるほど怒りも強く、
遂に代表の数人が家に乗り込で來
て、わめき散らし、当り散らしま
した。騎虎の勢い、チエノさんは
家より叩き出され、めぼしい身の

廻り品も、外に投げつけられまし
た。

「二度と家に入ってはならぬ」

それが怒りに狂った男たちの叫
びでした。チエノさんは屈辱と怒
りにふるえながら、涙もぬぐわず
歯をくいしばっていました。

「お母ちやん！」

一人娘のりつよさんがすがりつ
きました。チエノさんは我が子を
だきしめ、外に投げ出された僅か
な身の廻り品を風呂敷につゝみ、
悄然と立ち去つて行くほかはあり
ませんでした。

然し実家へは戻ることは出来ま
せん。十一年もの忍耐の末、やつ
と改宗せしめた家を、どうしてこ

のまゝ見捨てることが出来ましょ
う。里へ戻れば、これこそ二度と
出口の家に戻れないことは、火を
見るより明かであつたからです。

といつて、ほかに頼るべき家も
ない此の二人の母と子が、足をと
どめたのは村の櫛の下でした。ふ
ところには一錢のお金もなく、夜
の寒さが身にしみました。チエノ
さんは我が子をだきしめながら、
一晩中お題目を唱えつけました
りつよさんも母にしがみつきなが
ら、お題目を唱えました。この親
子の頼るべきものは、三千大千世
界の中、たゞお題目のほかはなか
つたのです。当時りつよさんは、
まだ十才になつたばかりの少女で

した。

それより數十年すぎた今日、年
も六十九才になつたりつよさんが
当時を回想して、

「子供心にも受けた、あの時の悲
しみは、いまだに忘れることは出
来ません」

と語つていましたが、もつとも
なことであつたでしよう。

幸い、仲裁に入る人があつて、
母子は無事に元の家に戻ることは
出来ました。然しそれ以来、親戚
との交際は一切断絶され、村八分
のようなく立状態に甘じなければ
ならなくなりました。

孤独なるチエノさんの心は必然
我が子に注がれました。積極的な

厳しい信仰が子供にしつけられ行
きました。

信仰とは本来孤独なるものです
ない中は、御飯をたべてはならな
が、この孤独なる信仰を語りあい
勵ましあうものは、母子二人以外
誰もいなかつたのです。

チエノさんは少くとも月に一度
は、必ず蓮華寺へ月参りをしまし
た。数里の道をトボトボと歩いて
お寺参りをするチエノさんのそば
には、しつかりと母親の手をにぎ
りしめたりつよさん、いたいけ
ない姿の見うけられないことはあ
りませんでした。

「三宝さまのお参りは、親の元への
里戻りじや」

チエノさんの我が子に対するし
つけは、料理や裁縫よりも、何よ
りもまして先ず信仰、信仰、たゞ
信仰一筋でした。たとえ命を縮め
ても、一寸の妥協すら許さないお
題目一筋の信仰であつたのです。

「三宝さまのおかげで、毎日つゝ
がなく働かせてもらつていてる」

私が子に注がれました。積極的な

飯も食べられている」

「三宝さまに御仏飯をおそなえし
ない中は、御飯をたべてはならな
い」

思うに信仰というものは、信奉
する宗教に対して純粹であればあ
るほど、また忠実であればあるほ

ど、寸分の妥協をも許さないものであり、むしろ排他的になりがちなものです。

日蓮大型人の場合においても、法華経信仰に対する純粹性と忠実性の故に、流罪、死罪も度びかさなる数知れない迫害にあいながら、微塵も妥協の色さえ見せてはおりません。死を惜してまでも信仰の純粹性を守り抜いています。

然し、その徹底した非妥協的態

度の中には、排他性は兎の毛でついたほどもありませんでした。なるほど大聖人は、たしかに、「念佛無間、禪天魔、真言亡國、律國賊」

という四個の格言を、有名すぎ

るほどにまで絶叫されています。

然しその叫絶は、大聖人自身、微塵も排他性をもつたものではなく、むしろ念佛宗にせよ、禪宗にせよ、或は真言宗や律宗にせよ、他のあらゆる宗教をも包摂々取し、その上で、それらの宗教が、それよりの方便にとらわれてゐる迷妄を、破折開会すべく獅子吼された、爆流するが如き「絶対愛」の発露であったのです。

古来、往々にして四個格言は、極端な排他性にみちたものとみなされて来ました。特にこの見あやまりは世間よりも日蓮門下の内に甚しいものがあつたほどでした。

信仰の純粹性を守りぬき、法華

經に忠実であらんとして非妥協に徹したチエノさんが、どのように四個格言を理解し、どの程度までに攝取の愛に達していたかは知る由もありませんが、チエノさんの信仰をそのまま継承した娘のりつよさんが、成人して結婚した後、夫と信仰上のことでいさかい、その非妥協性の故に、遂には、どうにもならない信仰上の大きな壁につき当たり、信仰上のことだけなく、家庭破滅の寸前にまで追い込まれてしまうのです。この物語りは、どうしてりつよさんが、その壁を打ち破り、家庭成仏の道を開いたかということを明かにしようとするほかなりません。

執筆のお進めと原稿募集

最近「驚峰」についてその編集方法にいくつかの注文を聞いています。「昔は良かった」としこの理由を「内容が豊富だったし、わかり易く身近かな問題として取り上げることができた」といわれます。確かにその通りです。ですから一部の人の教学発表の機関紙とみられ勝ちな昨今の状態から脱皮する為にも「信仰する者達の共同発表の場」とすることに努力せねばなりません。そしてそれに有縁の皆様の声がどうしても必要です。ご多忙の毎日と存じますが、仕事の合間に就寝の前にペンを取つて自分の思いを紙に綴る習慣をつけて下さい。決して美辞麗句を必要とするものではありません。思いままを綴れば良いのです。「こんなことを書いたのでは」との懸念は無用です。書くとい

うことは不思議と自身のつくものです。執筆困難な鎌倉時代に大聖人は四百余編の文章を残され、それが末代の私達には大聖人を知り信仰に励む唯一のてだてとなつておることに注目しましょう

活字も大きく、装丁もかえ新書判の大きさに、頁数も多くといろ／＼考えていますが、印刷所藤田さんの好意で非常に安価にしていただいています関係上、現今予算の段階ではこれ以上の無理は出来ません。「どなたにも進められる本」というのを第一に考えて編集してまいりたく、それにはまず皆様方からの原稿を心からお待ち致しております。

尚原稿をいただき乍ら、連載物ゆえに中断となりました方々に、紙上をかりて深くお詫び申し上げます。どうぞ本年はペンを取ることを習慣にするよう努力をして下さい。

編集子

編集後記

鷲峰正月号

昭和四十三年 第六卷 第三十九号

定価 五十円 送料 二十五円

昭和四十三年一月五日 印刷
昭和四十三年一月十日 発行

編集兼発行人

山梨県身延町波木井三区醍醐園本妙庵

日 高 白 象

印刷所 山梨県身延町梅平

藤田印刷所

発行事務所

山梨県身延町波木井三区四一二五

鷲峰会

電話（身延山）四五九番
振替（甲府）二〇九三番

★「成功の秘訣は『今』人・時・處をいのちがけで生きることだけだ」言葉は強いがこの現象の世界は「神の愛しかない」と説く美を求め続けた老婦人画家の若者に与える一句である。今という時空の接点に全てのあることを思うて、今を最善に生きることに全ては尽きるのだ！鷲峰会再発足、暫定的会則を報告して諸賢の發憤興起を祈ると共に、無理せぬ様段々と軌道に乗せるべく努力する覚悟である★今度鷲峰編集を一任の形となり、質の底下、編集ますさがますお目につくと思うが専心努力の決意故、何卒御容赦願い度い★連載ものがいつも中斷の形で読書欲喪失に追車をかけるようになり、重ねてお詫びする次第です★本妙庵も昨年九月以来学生三名が常住し、出来ればもつと増員して増築せねばならぬという所にまでもつて行き度い。一同生活の苦しさ楽しさを充分味わい、踏まれても蹴らても雑草の様に強く生きる根性だけは人一倍、道念堅固に育つであろう。

△本良△

誌代 半年分 四五〇円（送料共）
一年分 九〇〇円（料送共）
一年分 三〇〇〇円（分納可）